

Title	「闇の奥」：コンラッド研究(1)
Sub Title	A study of Conrad (I) : Heart of Darkness
Author	上村, 達雄(Kamimura, Tatsuo)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1968
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.25, (1968. 3) ,p.168- 184
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	英語英文学・独語独文学特集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0168">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00250001-0168</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「闇の奥」

## コンラッド研究 (1)

### 上村達雄

#### (1)

19世紀も末のある年、アフリカのコンゴ河を遡る一艘の汽船が、いまある部落の前に碇泊している。この船は沿岸の眉を圧するジャングルの壁と、時たまあらわれる土人の部落と、その他は目くるめく太陽と水と沈黙の世界を一と月ちかくも旅して、ここまで来たのである。いま甲板に二人の白人が何事かを熱心に語り合っている。二人は、このあたりを根拠にして、多くの黒人を手下に、象牙を狩り集めている Kurtz という人物のことを語り合っているのである。Kurtz は彼の所属している会社のために、コンゴ河流域の他の一切の支所からの分を合せたものよりも多い象牙を、自分の管下の支所から出荷している敏腕家であるが、またなぜか悪名も高い。その Kurtz が病んでいるという情報が奥地から流れて来たので、会社はこうして船を派遣して、彼を引きとろうとしているのである。すでにおも立った一行は船をおりて、彼の住居の方へ向っている。

「あの人のおかげで、私は心がひらけたんです」<sup>(1)</sup>(p. 125) そういうのは二人の内のロシアの青年である。(しかしその名前は記されていない。) 船はつい今しがた岸辺から手をふっていた彼を乗せたばかりであった。彼もまた船乗りであったが、単身アフリカの奥地にまぎれ込んで Kurtz に出会い、その魅力にとりつかれて、影のように Kurtz に添って離れなかった。Kurtz が二度患ったときも、手厚い看病をしてやった。Kurtz が象牙への

執着に目がくらんで、その青年の持ち分までよこせとあって、銃をつきつけたときにも、素直に応じてやった。Kurtz はそういう順従で無抵抗なおのれの崇拜者を、蛮地での唯一の白人の仲間として、自作の詩をそらんにて聞かせたり、愛や抱負経緯について夜通し語り聞かせたりしたが、その体力も限度に来て、蛮地での激しい生活が重荷になり始めていたので、青年は自分といっしょに文明の世界へ戻ろうと申し出たが、頑としてきかずに、いっそう奥地の湖沼地帯へと遠征して、そこから象牙とともに多数の原住民を従えて戻って来たのが、ついこの間のことであった。

「へえ！ Kurtz は気が違ったのかな。」(p. 129) と、もうひとりの白人であり、さし当っての船長であり、一篇の語り手でもある Marlow<sup>(2)</sup>がいうと、青年はむきになって、そんなはずはない、現に自分は二日前にちゃんとした彼に会っているんだからと抗弁する。

ところで Marlow にとっては、いまは大事な一瞬々々である。この苦痛の連続であったアフリカの旅のクライマックスが彼に訪れようとしているのである。コンゴ河川の Matadi に到着して間もないころから、Kurtz のうわさは折にふれて耳にしていた。——「奥地支所の主任」「第一級の駐在員」「驚歎すべき人物」「ヨーロッパから付託された大義」を実現させる人間云々と。そして会社が Kurtz を次のアフリカ総支配人にとり立てるのではないかといううわさが、コンゴ河川沿いの同輩たちを嫉妬と不安にかり立て、その対抗策としてさまざまな陰險な策謀が行われ、Marlow 自身そのとぼっちりを受けて、船脚をいちじるしく遅らされたのだった。Marlow の Kurtz に対する興味は、その他にも幾つかの間接の出会いを通じて強められて来た。——ある支所に飾ってあった Kurtz の画いたという油絵には、目かくしされた婦人が炬火をかざして暗がりの中に堂々と身ぶりしていたが、その顔に落ちかゝる炬火の光は何か不吉であった。<sup>(3)</sup> (p. 79) また Kurtz が一般の白人とは比較にならない高邁な識見を植民地経営に対して抱いていて、「各支所は文明化への途を照らす灯台でなければならぬ。むろん取引の中心地ではあろうが、同時に人間性をゆたかにし、改善し、教化するためのものでもあるのだ。」(p. 91) という主張をもってお

り、同輩たちがひそかにそれをあざ笑っていることも知った。またまことに不思議なことに、国際野蛮慣習防止協会の求めに応じて Kurtz が書いたという白人のための行動指針を盛った小冊子を読んでも、それは慈悲と博愛の精神に貫かれた大文章であったが、ただ、末尾にあとから書き加えたいらしい全く異質な一と言が、稲妻のように眼を射たのである。「蛮人どもを絶滅せよ！」<sup>(4)</sup>(p. 118)

しかし、Marlow が決定的にこの不可思議な存在に惹かれる自分を発見したのは、Kurtz の支所へあと 8 マイルまでたどり着いて、船が濃い霧に巻かれ、その霧の向うから、土民たちに槍や毒矢の雨を浴びせられ、黒人の舵手が槍を脇腹に受けて、目の前で死んで行ったときであった。(この土民たちの襲撃は文明世界へ帰りたくない Kurtz の差金であったことが、あとで判る。Kurtz は会社が自分を収容するために船を送ったことを知って、自分の支配下の土民にその船を襲わせた。それは、土民がこのように蜂起して乱におよんでいる以上その支配者である Kurtz はすでに病死している。救出に行っても無駄だと船の連中に思わせるためであった。)<sup>(5)</sup> 舵手の血にひたされたおのれの靴の片方を、船外へほうり投げたときに Marlow は、Kurtz と語り合うこと——これこそ自分が待ち望んでいたことなのだ。」(p. 113)と悟った。船内には、Kurtz は死んだのかも知れないといううわさが流れる。Marlow はいよいよ憧れを燃やす。

しかも奇妙なことには、Marlow にとって、Kurtz は行動する人間としてでなく、語る人間、声の人間として予感される。なぜなら、「Kurtz の天分の中で、もっとも際立って、真に実在感を伴うものは語る力であり、彼の言葉であり、——それは表現力であり、眩惑であり、解明であり、最高のものであると同時に最卑賤なものであり、光の脈動する流れであり、また計り知れぬ闇の奥からの、人をまどわす流れである」からである。(p. 113～4) こののち、Kurtz の支所のすぐ近くで、例のロシア青年を船にのせたことから、Kurtz の生存を知った Marlow は、期待をこめて Kurtz の住居だといわれる草にうもれた泥の小屋の方を、双眼鏡で見つめる。その小屋をとり巻くように何本か棒杖が立っている。よく見るとその棒杖の

上に、それぞれ一個ずつ黒人のひからびた首が刺してあった。――眼は閉じ、唇は乾燥してまくれ上り、白い歯が笑っているようにのぞいていた。

(p.130～1) 反逆者の首をはねてあのように見せしめにしてあるのだ、と青年は説明する。Kurtz はこの地方では王者のようで、酋長たちは毎日彼に謁見を求めて、地に這いながらやって来るのだという。

Marlow がこの旅のクライマックスとして待ち望んでいた瞬間が、こんな形で訪れようとは――。アフリカの経営には慈悲と博愛の精神が必要だと説き、そこでの白人の役割は、取引のみに限られてはならない、闇を照らす灯台でなければならぬと説いていた Kurtz の正体が、これだったのか。もちろんこれまでも Kurtz の異常を物語る材料はいくつかあった。しかし、それらは彼の傑出を物語る材料の中から、時々不気味にチラついていただけであった。

しかし、ここでの Marlow は意外なほどに冷静である。「私はあなた方が想像するほどのショックは受けなかった。」(p.130) なぜか、と当然いぶかる読者に、Conrad は例の如く直接の答は与えずに、その空白を読者の側で埋めるにまかせている。そこでまず考えられることは、ここまで異常な旅を続けて来た Marlow には、いまはどんな残酷な光景にも耐えられるだけの神経の強さ、または神経の磨耗が存在するということである。ショックはなし崩しに来ていたのである。船がアフリカの沿岸ををコンゴールに向って南下していたときに、土民の部落めがけて6インチ砲をぶち込むフランスの軍艦に行き会った。砲口から小さな火と小さな煙があがり、砲弾が弱いなりをのこして消えると、あとには何も起らなかった。「このやり口には狂気じみた点があり、その光景にはいたましい道化の感じがあって、船の誰かが、あのあたりには土民――敵と彼は呼んだものだ！――の陣営がかくれているんだと真顔で教えてくれたが、やっぱり道化の感じはぬぐえなかった。」(p.61～2) さらに全コンゴールの基地である Matadi では、鉄道布設のためと称して文明世界から持ち込まれたさまざまな機械道具類が、草むらの中で赤さびて朽ちて行くのを見たし、またあるときは、額を銃でぶち抜かれた黒人の死体が道のはたに放置されているのを見た。

またあるときには、鉄の鎖で首から首へと数珠つなぎにされた黒人たちが、労働へとかり立てられるのを見た。そういう黒人たちが力尽きて、樹陰に集ってじわじわと緩慢に死んでゆくのを、平然と見すごしながら、商売の帳面づけにいそしんでいる白人たちを見た。<sup>(7)</sup> しかもその白人たちの側に、植民地経営の確固たる理念がなく、ひたすら目先の利益を追い、「どこへ行っても『象牙』という言葉が空中に鳴りひびき、人にささやかれ、溜息に洩れて出た。」(p. 76) ——ありあまるひまを他人の中傷誹謗と、競争相手の排除についやすばかりであった。20世紀の二度の大戦と、それにまつわる人間の墮地獄の極みをつぶさに体験して来た現代人の眼を以てしては、Conrad がこのときに受けたであろうショックの大きさが充分理解できないうらみがあるが、時はヴィクトリア朝末期、機械文明の前途に大きな虹がかかり、人類の啓蒙教化による道徳的進歩の可能性がまじめに信じられていた時代である。いかにペシミスティックな Conrad といえども、そういう時代精神の埒外にいたわけではない。進歩の担い手として自他ともに許す白人が、本国を遠く離れた「暗黒大陸」で弱い者に対しておこなうこの蛮行と、白人自身のこの脆弱な精神構造を目のあたりして、Marlow の感じたであろう驚きと失意は、絶叫とならずに、かえって静かな冷徹な事実描写となって積み重ねられて行く。従って読者としては、この突き放したさり気ない事実描写の連続の裏に、Conrad の、したがって Marlow の心の姿を推しはかるべきであって、驚きと失意の果てに、彼の神経はもうおおかたの惨事には動じないだけの訓練を経ているのだと考えられるのである。しかしそれにしても、あれだけ高邁な精神をもっていたはずの Kurtz が、なぜ……という疑問を、おそらく Marlow も抱いたであろうが、以下はそれに対する Marlow 自身の解答である。

「あれらの首は、おのれのさまざまな欲望を充足させる上で、Kurtz 氏に抑制が欠けていることを示しているにすぎず、緊急の必要が生じた場合に、おのれの壮麗な雄弁の中には求められないある事柄——ある小さな事柄が彼に欠けていることを示しているだけだ。彼がそういう欠陥を自覚していたかどうかはわからない。多分最後になって、——ぎりぎりの最後に

なってやっと、そういうことに気がついたのだろう。しかし荒野がいち早く彼を発見してしまったのだ。そして彼の向う見ずな侵入に対して、こっぴどい復讐を遂げてしまったのだ。荒野が彼の自覚していなかった一面を、彼がこの巨大なる孤絶と対話するまで無智であったおのれの一面を、彼にささやいたのだろう。――そしてそのささやきは果せるかな、抗し難い魅力をもっていたのだった。彼はしんが空っぽだったから、そのささやきは身内に高らかにこだましたのだ。」(p. 131)

しんが空っぽなのは Kurtz ばかりではない、人間はみなそうであり、そういう人間がひとたび荒野の呪縛にあえば、おのれの知らない一面を露呈することになる、という Marlow の言外の訴えが聞こえてこないであろうか。筆者には、Malrow がこのあたりからいちじるしく Kurtz の側に立ち始めていることが感じられる。そして大事なことは、Marlow がそのロシア青年が語る Kurtz 主宰の真夜のダンスと、そのあとの名状しがたい儀式、<sup>(8)</sup>および酋長たちの這いつくばりの譎見の話の方に、いっそう堪え難い嫌悪を覚えることである。Marlow は、そんな話はもう聞きたくないと呼んで激しく青年の口を封ずるのである。

「ひっきょう、その方(一晒し首)は単なる野蛮な光景にすぎないが、もう一方の話を聞くと、私は一足飛びに何かいいようもなくぞっとさせる暗黒の領域へ運び込まれたかのような感じがし、そんなときには純粋な、まぎれない蛮行の方が、太陽の下に存在する確かな権利をもっているだけに、救いになるのだった。」(p. 132) これが単に感覚的な好悪をいっているだけなら、問題はないが、事実はまだ少し根本的な倫理的選択にかかわっているかのようである。殺害と晒し首の蛮行と、たかが黒人を地に這わせるだけのいわば遊びと、いずれが罪かは誰の目にも明らかである。にもかかわらず Marlow は、前者に理解を示し、後者を峻拒する。すべては闇の奥での事、という文脈を考慮に入れたにしても、やはり奇妙である。そこでやや巨視的に作品を眺めながら、この不可解な選択を理由づけてみよう。

Marlow はアフリカの沿岸にさしかかった当初から、この「暗黒大陸」

における白人の存在の権利に疑いを抱いて来た。汽船の上から漕ぎ寄って来る黒人の小舟を見おろしたとき、黒人の姿を Marlow はこう表現している。「彼らはわめき、歌った。体には汗がしたたっていた。連中の顔ときたら、グロテスクなお面のようだった。しかしたくましい骨格と、筋肉と、野性の活力と、岸に打ちよせる波のように自然で真実な運動の強烈なエネルギーを有していた。彼らはそこに存在していることに何の弁解も要らなかった。彼らを見ていると私の心は大いに和んだ。しばらくは、自分が平明な事実の世界にまだ属していることを感じるのだった。」(p. 61) いい換えれば、白人たちはそこでは余計者であり、弁解なしには存在の権利を有しない侵入者なのである。そして黒人が「真実な運動のエネルギー」をもって、「平明な事実の世界」に生きているとすれば、黒人同志の間でおこなわれる部族間の殺害や、死体の冒瀆や、時には食人さえも、太陽の下で存在する権利をもっているはずである。それを裁く文明の尺度がそこにはないからだ。いま Kurtz は白人でありながら、荒野のささやきに魅せられて、黒人と同じような、またはそれ以上の運動のエネルギーをもって、生きている。従って彼のおこなう殺害と死体冒瀆は、野蛮ではあっても「平明な事実の世界」に属することがらであって、太陽の下に存在する権利を有する。しかしそのためには彼が自身の生活のみならず、心まで周囲の黒人と同じ次元に保つことが絶対に必要である。にもかかわらず、Kurtz は白人として、周囲に神のように君臨しようとする。そのために陰にこもった得体の知れない儀式をあみ出して、周囲の崇拜を要求する。その現れとしての這いつくばりの謁見は、まさに存在の権利をもたない嫌悪すべき文明の醜行なのだ。そこには平等を拒否し、支配を神聖化そうとする汚い文明人のエゴイズムがかくされているのだ。——Marlow の一見奇妙な倫理的選択を一応このように跡づけてみたのであるが、ここに筆者が見出す思想は、単なる政治的人種的な平等関係の樹立というようなものではなく、むしろ人間の命というものに対する Cornad の何か古武士のようなストイックな考え方である。——人は場合によっては相手の命を断つことも是認される、むしろ屈辱の内に相手を生かしておくことこそ恥ずべき

である。これを自己の側に置き換えれば、屈辱の内に命をなごらえるよりは、名誉を守って命を捨てるべきである、というあの *Lord Jim* の中の若い船乗りが痛恨の内に生涯覚え続けた人生智にかよものがあるように思われる。

## (2)

さて間もなく、Kurtz はいたいたしく病みほおけた姿で、担架にのせられて船へ運ばれて来た。彼に心服し彼を畏怖していた黒人たちは、自分たちの神を奪われることに不穏な動きを見せようとしたが、大事に至らなかった。Kurtz は「古い象牙に彫られた死の像が生きて動いている」(p. 134) ような姿をしていたが、Marlow の想像通り、ゆたかな声量をもって楽々と発せられるその声は、すばらしかった。Kurtz の早い死を予期して、自分たちのアフリカでの地位に対する不安から解放された白人たちは、Kurtz に船の一室をあてがって、手厚い看護を加えた。総支配人らは Kurtz を、過去においては会社のために貢献したりっばな人物であったが、すでにその命脈は尽きて、彼の支所運営のやり方は会社にとって有害になっているのだと断言する。同時に彼らが Marlow に対しても、妙に Kurtz と抱き合わせにしたような難詰の態度をとり始めたことに、Marlow は気づく。しかしそれも、Marlow の心の中で Kurtz と自己との同一性の意識が次第に強まって行ったことの、外界への投影であったかも知れない。Kurtz はその後間もなく、船旅の途中で死んだ。<sup>(9)</sup>

しかしその前に、Kurtz は一度脱走を計っている。すすなわち彼は船に収容されたその夜にひそかに船室から脱走して、ふたたび闇の奥におのれを没入させようと、草むらの中を旧居を目指して這っていった。これまでは黒人の酋長たちに這わせていた支配者が、いまはみずから這う身となって彼らのもとへ逃げ帰ろうとするのであった。現にすぐ近くの森の中では彼の不在を悲しむ黒人たちが、かがり火を燃やし、太鼓を叩いて、不気味な呪文を口々に唱えていた。もし Kurtz が草むらの中から、彼らに向かって一と言叫べば、彼らは一斉に蜂起して、Kurtz を奪還し、船に敵対するで

あろう。Kurtz の脱走に気づいて単身あとを追って来た Marlow は、そういう危機の中で、もし万一 Kurtz が叫び声をあげれば、たちどころに止め殺してしまう覚悟で、説得にかかった。簡潔にしか記されていない二人の言葉のやりとりは、こうである。(p. 143)

「あなたは自分のやっていることが、わかっているんですか?」

「完全に。」

「破滅ですよ、——まったくの破滅ですよ。」

「私には数限りない計画があったんだ。……私は偉大な仕事をやりかけていたんだ。」

Marlow は Kurtz の上に「重くのしかかっている荒野の無言の呪縛……それのみが彼を森のへりへ、繁みの中へ、かがり火の輝きの方へ、太鼓の音へ、奇怪な呪文のうなり声の方へと追いやり、それのみが彼の無規律な靈魂を、許容された野望の限度を超えて、いざなってきた」(p. 144) その呪縛を解き放そうと全力を尽す。もはや人間を相手にしているというよりも、靈魂を相手にしての格闘であった。その靈魂は依然として鋭い明知をひらめかせていたから、説得は可能かと思われたが、いかんせん、荒野での孤絶のためにすでに狂っていたのだ。やむなく Marlow は、その「抑制もなく、信仰もなく、恐怖もなく、それでいてやみくもに自らとあらがっている想像を絶した神秘的な靈魂」(p. 145) を背に負って、船に帰り着くのである。子供の目方ぐらいしかなかったのに、なぜか Marlow には半トンもの重荷を負ったかのような疲労が残った。marlow はこれより先に、ロシア青年に向って、「私はある意味で Kurtz の友人なんだ。」(p. 138) と、思わず口走っていた。Kurtz とおのれとの近親性、類似性は心の中でいよいよはっきりして来るのだった。もし Kurtz の行状と運命が悪夢なら、「私はこの自分が選んだ悪夢に忠実でなければならぬ…」(p. 141) と心に決めて、Kurtz の運命に参加しようとさえするのである。「Kurtz は……埋められたも同然だった。そしてしばらくは私も、いい難い秘密に充ちた広大な墓に埋められたような感じがした。」(p. 138) そして Kurtz が夜中に船室を脱出してしまったことに気づいたときの Marlow の思いは、

——黒人たちが奪回した Kurtz を擁して、逆襲をかけて来はしまいかという月並みなものであるよりも、まず、「道徳的なショック」the moral shock (p. 141) であったという。

ためらい勝ちにはあるが、何の補足もなしに投げ出されているこの言葉の意味するところを、しばらく考えてみたい。そしてそれはまた、Marlow と Kurtz の近親性をいっそう明らかにすることにもなるのである。

Marlow はこれまでの旅で、周囲の白人たちの所業を冷い観察眼で捕え、それを語って来た。しかし彼自身英国人であり、<sup>(10)</sup> アフリカ争奪に血眼になっているヨーロッパ全体が問題となっている限りにおいて、彼もまた責任の一端を負わねばならない身である。現に最初の上陸地で、Marlow は黒人の現場監督から、ただ白人であるというだけで最敬礼を受けたときに、「結局、私もまたこうした高遠で、正当な（もちろん反語である——）大義名分の一翼を担っているのだ。」(p. 65)と感ずる。その彼がコンゴ河を遡って行く内に、兩岸に黒人たちが現れて、船の方に向かって叫んだり、手を打ったり、足をふみならしたりするのを見送るにつれて、「あの騒音の中にも意味が、——太古の闇とはこんなに無縁な自分にもわかるような、意味があるのではないかという、かすかな疑い」(p. 96)が湧くのである。それも当然ではないか。「人間の心には、何でも可能なのだ、——なぜなら、心の中には一切の未来ばかりか、一切の過去が、つまりすべてが存在するからだ。」(p. 96)さらに決定的に黒人たちとの血のつながりを意識するのは、船が霧の中で襲われて、黒人の舵手が死んでゆくときである。「そして彼（舵手）が傷を負ったときに私に向けたまなざしの、親しみのこもった深遠さは今も忘れられない。——決定的な瞬間に、遠い血縁関係の存在が裏づけられたようなものだ。」(p. 119)白人でありながら、黒人との血縁関係をこう直感することのできた Marlow は、おそらく Kurtz にもこうした闇とおのれとの同一性の発見はもっと強烈に押し寄せたであろうし、だからこそ Kurtz は闇の力に圧倒されて非道の限りを尽したのもあろう、と当然推測したはずだ。してみると、Marlow 自身も闇の奥に身を没した暁には、似たようなことをやらないとは決して保証で

きない。Kurtz の問題は、Marlow 自身の問題であり、Kurtz は Marlow の分身であり、その分身を闇での破滅から船へと、せっかく救い上げたと思つた矢先、その夜の内にそれが脱走してふたたび闇に帰してしまうというのは、正に「道徳的ショック」であつたに違いない。

ちなみに、人間は危機にのぞんでは、主義や原理や信条を貫くためには命をもすてるべきであるのに、実際はそれらを易々と裏切つて、生への盲目の意志に引きずられて生きるものである、という Conrad の人間観は、先にもふれた *Lord Jim* の重要なモチーフの一つであるが、これらとほぼ同じ時期に Conrad が、ある理想主義的肌合の友人に宛てた次の手紙も、端的な言葉で同じことを語っている。(1898年2月附)

「ああ、貴君が改革しようと欲しているのは、社会制度でなくて——人間性なのです。貴君のそんな信仰は山を動かすことはできないでしょう。さりとて私は、人間が本来悪いといっているのではないのです。ただ人間は愚かで、臆病なのです。しかも臆病こそ一切の悪の——とりわけ現代文明の特色であるある残虐性の根源なのです。しかしその残虐性がなかったら人間は滅びるでしょう。それは決して偉大な事柄ではない。しかし人間に剣と楯とを捨てよと説得することはとうていできない。貴君にしたつて、こうして不動の確信をこめてこれらの言葉を書きつけている私をさえ、説得することができないでしょう。そうです、私は卑劣漢の仲間なのです。私たちの全部がそうなのです。私たちはそういうふうになつて生きているし、後から来る世代も、反省も疑問も呵責もなしに、神の名において恐怖と獣性の遺産をわしづかみにするのです。」<sup>(11)</sup>

「私はコンゴアに行くまでは、ただの動物にすぎなかつた。」とは、彼の名高い言葉であるが、コンゴアから帰つて間もなく人に与えた手紙にも、「もしも人間が心と記憶(および頭脳)をえぐり捨てて、全く新しいものを入れ替えることができるとすれば、生きることは申し分なくたのしくなるでしょうに。」<sup>(12)</sup>(1890年6月附)とある通り、コンゴアの旅を契機として、彼がいかに動物的な仕合せな無智から、かげの濃い内省的な悲観主義へと移行していったかがよくわかる。そういうコンゴア体験の精髓を一と

言でいえば、Conrad が Kurtz の中におのれを見たことである。そして時を経てそれが思想化される場合に、その「おのれ」が、ほとんど「万人」にまで普遍化され、ペシミズムの色を濃くしてゆくのである。

さて、例外的な人物もちろん存在する。同じ Kurtz に出会いながら、Marlow とは全く対蹠的に、Kurtz をただ憧憬的として、師表として仰いでいたロシア青年がそれである。彼は白人たちが自分を象牙の取引の邪魔者として、なきものにしようとするのを Marlow から聞かされて、瀕死の Kurtz を見捨てて行く苦しみに打ち克って、さらに別の闇の奥へと去って行くのである。彼は Kurtz の狂態に接しても、自分は単純な人間だから、こみ入ったことはわからないのだと、しょげ返るのみで、生存の根底をゆさぶられることもなく、自己の内奥の闇をのぞき込むことも知らず、Kurtz への賛美を抱いたまま消えてゆくのである。この青年が、ありとあらゆる色の小片れでつぎの当たった、まるで道化のような雑色の服を着ていることは、稀有なお人好しぶりを道化にたとえた露骨な風刺であり、またその国籍をロシアに置いたことは、ロシア嫌いの作者の民族的な執念の現れでもあろうが、筆者は最後に登場する Kurtz の許婚の女性と併せて、あきらかな虚妄を軽信して疑わないその盲目な善良ぶりに、作意の目立ちすぎるのを感じて、高い評価を与えることをためらう。この二人は、Marlow が innocence からは程遠い、心に闇を蔵した近代人であることを、比較上際立たせるだけの役割は果しているが、独立した存在であるにはあまりに透明すぎて、どちらかというとも Conrad の後期に登場する硬化した人間観察を予感させるものがある。

ところで Marlow は Kurtz に死なれたあと、自身も熱病に倒れ生死の境をさまようのである。「そして船の連中はすんでのところを私を埋葬するところだった。」(p. 150) しかし彼は、生きて Kurtz の見た悪夢を最後まで見ることで、Kurtz への忠誠を果さねばならないと感ずる。しかし、もしも死ぬと決ったら、Kurtz の範にならって何かおのれのこれまでの経験を総括するような一言、真実の恐ろしい洞察をこめた一言をいい放って死にたい。だがその一言が Marlow には思い浮ばない。そういう自

分にひきくらべて、The horror! を二度くり返して死んだのは、Kurtz の勝利であったことを思い知る。「それは無限の敗北と忌わしい恐怖と、忌わしい満足を代償にして得られた断言であり、道徳的勝利であったのだ。」(p. 151) だからこそ自分は最後まで Kurtz に忠実であったし、これからずっとのち、何か純粋な靈魂からの彼の雄弁のこだまを聞くときも、彼に忠実であるだろう。

こうして Marlow は未だ熱の収まらない衰弱した体で、「白く塗りたる墓」(p. 55) である現代文明の支配する都会へと復帰する。そしてそこに生活する人々がすべて、危険がさし迫っていることも知らぬげに、見せかけだけの身の安全をたのんで、それぞれの仕事にいそしんでいるありさまを見て、自分たちの愚鈍をわざとひけらかしているのではないかとさえ疑うのである。「彼らは私の想念へ不法に侵入して来るのだが、私から見れば彼ら侵入者の人生智などは、いら立たい見せかけにすぎない。なぜなら彼らは私の知っていることを知っている気づかいは決してないのだから。」(p. 152) Conrad のこの熱病のような思いはその後永く彼の中に尾を引いた。それは1913年に彼と交わした会話を書きとめた Lady O. Morrell の次の手記からもうかがえる。

「彼は、自分が決してそこから立ち直れないでいるという道徳的肉体的ショックの見地から、コンゴーでの恐ろしい出来事を語りました。そのとき受けた印象はたいへん強烈なので、生涯忘れられまいと彼は感じていました。」

けれども Conrad は *Heart of Darkness* の中では、そういう断ち切れない思いを断ち切って、浄化を得ようと苦しんでいるかのように見える。なぜなら、テムズ河の河口で、引き潮を待つ間にネリー号という船の数名の乗客が、甲板で船乗り Marlow の昔話を聞くという形式で始められるこの物語において、Marlow は帆柱にもたれかかってあぐらをかき、降ろした両手の手のひらを上に向けて、何かの像に似た姿で話を始めることが初めに記され、(p. 46) 次に「彼は洋服を着て、あぐらをかき、蓮の花こそ無いが説法する仏陀の姿で、片手をひじから先だけ挙げてその手のひらを外

側に向けて」(p. 50) 話をつぐことが記され、三度目には最終ページに、「Marlow は語り終わった。彼は人々から離れたところに、おぼろげに静かに、冥想にふける仏陀の姿で座っていた。」(p. 162)と重ねて記されているのである。

コンゴーでの体験から8年を経過して書かれたという、作品の背後の現実が、作品の中では船乗りが好んでする遠い昔語り、とさらにおぼめかされ、しかも語り手は仏陀の姿勢をしているのである。このことの意味するところは一つや二つにとどまらないであろうが、理想をかざして蛮地へのり込みながら、悪魔の業を行って果てた人物 Kurtz への鎮魂の歌でもあれば、同じ可能性を秘めながらからも罪無く帰還したおのれの浄化と後生を念ずるいのりでもあろうし、19世紀末ヨーロッパの植民地争奪と原住民殺りくの罪のゆるしを大慈大悲に求めるいのりでもあれば、さらに窮極には、愚かと臆病ゆえに「剣と楯」とを捨てることのできない人間性そのものに対する、深い諦念でもあるであろう。

(註)

- (1) Joseph Conrad: *Youth/Heart of Darkness/ The End of the Tether* (London, J. M. Dent and Sons LTD, 1961) 以下ページ数は、すべて同書からの引用を示す。
- (2) 前作 *Youth* や、この *H. of D.* に併行して書かれた *Lord Jim* と同じく、Marlow という船乗りが語り手であるが、Conrad (1857—1924) は実際に1890年5月から翌年の正月にかけて、当時まだ謎とされていたコンゴ河の水源地をつきとめるのが目的の、ベルギーの探険隊に加わって、遊航船の船長の役目をつとめた。作中ではフランスの会社の船とされているが、それは職業上の秘密を守るためであった。それほど当時は、列強のアフリカ争奪の競争は激烈をきわめていた。この作品のまえがきで Conrad はこういっている。「『闇の奥』もまた体験談だが、読者の胸裏に深く浸透するよにとの、きわめて正しい意図から、事実より少し(ほんの少し)誇張された体験談である。」(ibid., p. vii)
- (3) Eloise K. Hay は *The Political Novels of Joseph Conrad*, The Univ. of Chicago Press (1963) の中で、この絵の意味を分析して、大要次のように述べている。——アフリカという原始の闇の中では、西欧からの文

明の光はむしろ不吉な陰險な干渉であり、そこでは土着の闇（無智にして無垢なる土民の心）こそ存在の権利を主張することが出来るのだ。たいまつをかざした女は、おそらくアフリカでのそういう役割を自負する Kurtz 自身であり、それが目かくしされているのは、彼がそのころすでに自ら神となって原住民を取奪し、虐待するあの無頼の兆候を内に感じはじめていたことを示すものではないか——と。

(4) 前の油絵の場合と同じく、ここでもこの一と言に対して Marlow がどう感じたかという直接的描写は何もない。それのみかこの前後の記述はすでに時間の流れを超越して、あとに起ったことが、前に割り込んで来て話の順序を狂わせ、そこに暗示的な摩擦を生じ、また Conrad 特有の渋滞し、渦を巻き、からみ合う思考過程の複雑さを感じさせる。さらに彼の文体は、T. E. Lawrence が指摘する通り、「自分のいいたいことが何であるかを決していわず、その書くところはすべて一種の飢餓状態で終り、それは自分にいえない、出来ない、思えない何かを暗示しているのだ。」(The Letters of T. E. Lawrence, ed. D. Garnett, pp. 301-2) 従って、この作品の場合も、単に筋を要約するだけの作業にも、主観的な補ないと、解釈と、再構成が必要とされるのである。

(5) 自分の靴を船外へ投げずるという行為の象徴性については、Albert Guerard が、その名著 *Conrad The Novelist*, Harvard Univ. Press (1958) の中で述べている見解と、同じく Guerard の考えとして E. K. Hay の前掲書の中に引用されている見解との間には非常な相違がある。すなわち前者では、「血に対する恐怖は、これから Marlow が出会おうとしている原始的なものに対する恐怖であろう。だから靴を船外に投げることは、文明的合理的なものの拒否ではなく、野蛮なものを名目的に拒否することを意味するであろう。」(p. 40)

ところが後者では、「Marlow は Kurtz に会う前に、おのが意識的心の象徴を脱ぎ捨て、『船外にほうり投げ』なければならないのだ。」(p. 141) として、荒野へ入る準備として、文明の所産である意識をすてるのだという見解を示している。この作品を直感と夢の要素を多分に含んだ内面への旅と解する Guerard にとっては、前の解釈は全体の論旨にそぐわないものがあり、おそらく後者が、より成熟した意見であろう。

(6) Marlow がまだ見ぬ Kurtz に対して、このような断定を下すことの不思議は、作中でも、またどの評論の中でも解明されていない。Kurtz を Marlow の分身であるとする Guerard の考え (p. 41) は、かなりの手掛を与えてくれるが、しかしまだこの段階では、Marlow には相手をおのが分身と感ずる材料さえ充分ではないはずだ。すでに闇の奥での出来事であり、一切はある意味での悪夢なのだと片附けることもいいが、別

の立場から、違う光をあててみることは出来ないであろうか。

Jerry Allen が近著 *The Sea Years of Joseph Conrad*, Doubleday and Company, INC. New York, (1965) の中で、Kurtz のモデルとなった人物を、従来は単に George A. Klein という名のフランス人の支所長で、その経歴はよくわからないとされていることから一步進めて、Conrad がコンゴを訪れる二年前、1888年に現地で土民の指導者に殺された E. Barttelot という当時28才のイギリス人の士官に注目している。Allen は探険家 Stanley の部下としてアフリカに乗り込んだ Barttelot が Stanley の期待を裏切ってみるみる墮落し、おのが部下の黒人を鞭打ちなどの直接間接の虐待によって一年以内に200名以上を死に至らしめたあげく、非業の死をとげた状況を、当時の新聞記事や、Stanley の報告演説などに基いて調べ上げ、それがいかに Kurtz の場合に似ているかを力説する。(p. 275-281) もとよりこれを裏付ける確証はないが、当時英国、米国の言論界や一般社会の大問題となったというこの Barttelot の事件を、Conrad が全く知らなかったと考えることは、むしろ不自然であろう。してみると Conrad は、Kurtz の中に彼が実際に救出した私人 Klein のイメージとともに、何程か Barttelot の面影を重ね合わせていたと考えることが出来るのではないだろうか。Kurtz が一面識もない Marlow によって、行動の人ではなく、雄弁の人、声の人と断定されている背後には、Barttelot がすでに二年前に死んだ人間であり、行動の余地は全くなく、彼をめぐる悪評のみ高いという事情が考えられるのではないか。

なお、モデルの問題に関しては、E. K. Hay は前掲書において、探険家 Cecil Rhodes が、強烈な理想主義と、悪魔的な自己中心癖を一身に備えていたことから、Kurtz の原型であろうと推測しているが、(p. 113-6) Jerry Allen の説に比べて、説得力は弱いように思われる。

- (7) Jerry Allen によれば、Conrad がアフリカに滞在していたころには、アメリカの下院の調査では、毎日千人以上の黒人が奴隷い狩りと強制労働と虐待のために殺され、その他の分も合わせれば、中部アフリカだけでも、毎年少なくとも40万人が殺されていたという。(p. 267)
- (8) この名状しがたい儀式についても、Conrad は口をつぐんで語らない。
- (9) 'Mistah Kurtz — he dead'. (p. 150) という黒人少年のメッセージは T. S. Eliot が、その詩 *The Hollow Men* (1925) の標題の下に引用したことはよく知られている。この詩の hollow の語も Conrad の考えを継承したものである。

また、Kurtz が死の直前に口走った言葉 'The horror! The horror!' (p. 149) も簡潔で、暗示的であるために、多くの批評家の注意をひいた。中でも最も深い分析を行っているのは、Edward W. Said: *Joseph*

*Conrad and the Fiction of Autobiography*, Harvard Univ. Press (1966) である。Said によれば、無明未分化の闇（低位の真実）に抗する努力が思考を生み、個性を分化せしめ、エゴイズムを養う。それが闇に対する光（文明）である。Kurtz は冒険心と植民への情熱から、闇の奥に挑戦して、そこにエゴイズムの光を投じようと苦闘した。およそ思想と行為の間のギャップは埋めがたいものであり、それを最終的に埋めるものは、両者の絶滅、つまり人間の死である。Kurtz は闇の真実と光のイメージを一身に体现しようとして及ばず、ついにその苦しみを、‘The horror!’ とささやいて死んだ。それは敗北には違いないが、しかし思想と行為を最終的に死によって調和せしめたことで、彼の勝利でもあったのだ。(p. 113, p. 147-8) 事実 Marlow もまた彼の死を、「道徳的勝利」と呼んでいる。(H. of D. p. 151)

一般に Said の Conrad 論は、作家の書簡を手がかりに、Said 自身の哲学的な方法を援用しつつ、Conrad の実存的苦悩を語り、彼が作家として歩み出さざるを得なかった内面的必然性を描き出すことに成功している点で、きわめて価値が高く、難解な Conrad の作品を統一的に理解する上に、役に立つものである。

- (10) Marlow が作者 Conrad をどの程度代弁しているかは、一つの問題であって、Eloise K. Hay は前掲書の中で、Conrad のポーランド人としての民族的な血を重視する立場から、イギリスの保守的な船乗りである Marlow を、軽々しく作者と同一視することをいましめている。Hay によれば、この一篇はそういう Marlow の手当り次第の思い出話であって、いたるところにウソがかくされているから、それを正しく判断してつなぎ合せなければ、作者の正体は把握出来ない、アフリカの問題にしても、作者の故国ポーランドは政治的に潔白で、侵略の仲間入りをしたことはないから、Conrad はアフリカに対して、Marlow とはちがった気持をもってははずである、云々。Hay のこれらの問題に関する分析は、作中の片言隻句をものがさずに追求する点で、精密をきわめるが、そのためにかえって、樹を見て森を見ずに終り、Conrad がこの作にかけた sincerity を大きく見失った感が深い。筆者は他の多くの批評家とともに、少くともこの一作においては、Marlow と Conrad の間に本質的な距離はないと考える。
- (11) E. W. Said, *ibid.*, p. 33.
- (12) *iqid.*, p. 18.
- (13) Jerry Allen, *ibid.*, p. 282.